

本当の強さとは

代田中・2 林田 綾加

今年の一月、代田中学校では創立五十周年記念式典が開かれ、記念講演が行われた。講師には、代田中学校の卒業生で、今年の箱根駅伝を走り切ったばかりの近藤幸太郎さんが招かれた。

箱根駅伝！？

父は、公園の話を知ると、どこからか一冊の本を出してきた。

「面白かったから読んでみるよ。」

本の題名は「風が強く吹いている」
私はびっくりした。父が小説を読んでいるなんて知らなかったからだ。だが、本は分厚いし、字も小さい。読むのに何日かかるだろう。最初は素直にうんと言えなかった。しかし、いつも小説をよんでいなさそうな父が薦めてくるのだから、きつと面白い話なのだろう。ずいぶん前に、いつも読んでいた雑誌で話題になった本で、その時に買って読んでみたらいい。十数年前のことらしいので父も詳しく覚えていないらしいが、特に陸上経験のない学生が同じアパートに住んでいるのをきっかけに箱根駅伝を目指し、見事大会に出場するという話らしい。私は、小学校の頃は、長距離走が好きだったけれど、今は剣道一筋。どちらかというと今は長距離走があまり得意ではない。そんな私だけれど、記念講演があることを知って、今年箱根駅伝のテレビ中継を見ていた。近藤先輩の話もすごく勉強になった。よし、この勢いで読んでみるか。重い腰をあげて、本を読んでもみることにした。

物語に登場する竹青荘の学生は箱根駅伝に出場するのにギリギリの十人。みんな個性的で、性格も全然違う。そして何より、走ることへの思いもばらばらだった。そんな十人がともに暮らし、何度

も衝突しながら、ともに辛い練習を乗り越え、同じ目標に向かって絆を深めながら箱根駅伝を走りぬく。そして十人は、それぞれに悩みを抱えながらも、走ることを通して向き合い、そして答えを見つけて出していく。そんな十人の姿に、私もこのままではいけないなと思った。

その十人の中で「走」という学生は、私に少し似ているところがあった。走は思っていることがなかなか言葉に出ない。言葉を探すのに時間がかかり、言うタイミングを逃してしまう。そんな走は自分がかかりし、悔しくなると、しまいに自分腹を立てていた。私も思っていることを言葉にするのが得意ではない。それどころか、自分が思っていること、感じていないことに気づいていないことがある。よくわからず怒っていることもある。走は、清瀬という走者兼コーチの学生に「長距離に必要なのは本当の強さだ」「速さだけでは、長い距離を戦いぬくことができない」「もっと強くなれ」と言われる。本当の強さとは何か、走は答えを探し、見つけていく。走は、「俺に欠けていたのは言葉だ」「思いを言葉にかえる力。自分の中の迷いや怒りや恐れを、冷静に分析する目」「走る自分を知らなければ。それがきつと、清瀬のいう強さだ」と気づく。私ははっとした。私のことを言っているのかと思った。私は、よく母に「自分のことを知りなさい」と言われる。うるさいなと思って聞き流していたけど、もしかしたらこういうことなのかもしれない。私もよく、強くなりたいたいと言っている。でも、自分を知ってどうということだ。

走は、周囲を信じろ、自分をもっと信じろと言われるが、意見が食い違っていると、過剰に反応して自分という存在そのものを否定された気持ちになる。でも、それではだめだと気づく。怒りは、怯えと自信のなさの裏返し。くり返し言われている「信じろ」とは、自分自身を、相手を「恐れずに認めろ」と言いたいのだろう、と走は気づく。「ただ走るだけでは、強くなれない。俺は俺を制御しなきゃならない」走はそう決意する。私はこの場面を読んで、息をのんだ。体

のすみずみに衝撃が走った気がした。そっか、私のもやもやを言葉にするとこういうことなのか。私も走と同じような気持ちになることが多い。一緒だ。それじゃだめだ。私も強くなりたい。そのためには、自分をコントロールしなければ。

清瀬は、走に「あせらなくていい。強くなるには時間がかかる。終わりはないと言ってもいい。長距離は一生をかけて取り組むに値する競技だ」「長距離の奥深いところは、そこなんだ」とも言っていた。私は、そうか、慌てなくていいんだとほっとすると同時に、簡単にはできるようにならないのかとがっかりした。私が今、夢中になっっている剣道の理念に、「剣道は剣の理法の修練による人間形成の道である」というものがある。同じなんだなと思った。自分を見つめ、自分に向き合い、成長するということは簡単なことではないらしい。剣道の先生方は何歳になれようとさらなる成長を目指し、稽古されている姿を目にする。私も負けてはいられない。もっと自分を見つめて強くなりたい、そう思った。